

拜宮農村舞台の活用

佐藤憲治

六月六日に復活公演を実現し、半世紀ぶりに眠りからさめた舞台が、その後も活用されています。白人神社の神様もきつと喜んでくれているでしょう。

小学校出前人形浄瑠璃公演

県文化振興財団の事業で、毎年、小学校へ人形浄瑠璃の出前公演を行っています。これまでは、小学校の体育館が会場でしたが、今回はじめて、農村舞台を利用し、町内の小学校の生徒に集まってもらって開催されました。

十月二二日、台風一過の秋晴れの中、拜宮農村舞台に、上那賀町の平谷小学校と海川小学校の子供たち五十名余りが集まりました。先生方や拜宮地区の方たちが見守る中、勝浦座のみなさんによる人形浄瑠璃の公演を鑑賞した後、口上、大夫、三味線、人形の各グループに分かれて指導を受け、最後に阿波鳴のさわりを子供たちが演じました。

●出演及び講師

- 大夫
- 連記佳月
- 三味線
- 豊澤町子
- 人形
- 勝浦座
- 口上
- 北島鬼若



白人神社に檜さん舞う

十一月三日、舞踊家・檜千尋さんが上那賀町拜宮の白人神社の秋祭りに見事な舞いを奉納してくれました。かつては、地域の子どもたちが「乙女の舞い」や「浦安の舞い」を奉納していたそうですが、過疎化と高齢化に伴って、ここ数年休止していました。

ひんやりとした空気の流れる農村舞台の前の境内に、文楽人形師・大江巳之助氏がつくった面をつけて降り立った檜さんは、まるで白人神社の神様の化身のようでした。本殿側の石段の上に現れた瞬間から、見守る人の視線を釘付けにする魅力あふれる公演には、小さな子どもも引き込まれて見入っていました。



第八回阿波人形浄瑠璃フェスティバル

プレイベント 船渡御

徳島県文化振興財団事業部長 坂本憲一

「阿波人形浄瑠璃フェスティバル」の小旗を船縁いっぱいに掲げ、阿波鳴の語り、ドラの音も高らかに周遊船二隻が新町川の川面をゆつくりと進んで行く。船には、三番叟（今回は児童が三番叟に扮している）、浄瑠璃の太夫、同じく三味線の師匠、人形遣いの人達が乗り込み、三番叟に扮した子供達が対岸の人達に手を振る。三味線のリズムに合わせて人形遣いが愛嬌たっぷりに木偶を操る。おりしもこの日、新町川公園では、「04ふるさとカーニバル阿波の狸まつり」が盛大に行われており、人出はすこぶる多く、物珍しさも手伝って沢山の見物人が手を振って船渡御に応える。これは、十一月七日、新町川で行われた「船渡御」の一場面である。

船渡御は新町橋南詰めの東公園の浮き舞台を二時に出船。所要時間は四十分、郷土文化会館横の船着場付近でUターン、船着場・両国橋間を一周するコースである。この船渡御は、徳島県文化振興財団と徳島県民文化祭開催委員会が主催し、毎年開催している阿波人形浄瑠璃フェスティバルのプレイベントとして実施されるもので、フェスティバルは今年で八回目、船渡御は、平成十四年度から始まり、今年で三回目を数える。

船渡御は、本来は、御座船に神の御霊代を移した神輿を乗せて移動する神事であり、愛知県の津島祭りや東京の神田明神の船渡御がとに有名である。中でも



津島祭りでは、六艘のダンジリ船に多数の提灯を飾り、その一つには、能人形という人形を乗せる。プレイベントとしての船渡御も、三番叟の人形を乗せるところは同じである。当然ながらプレイベント「船渡御」の命名もこの三番叟乗船に由来している。三番叟は、使用される木偶の中でも別格で、楽屋でも本来は一段高い位置に置かれ御神酒が供えられるほど神格化した木偶なのである。

イベントのキャッチフレーズは、「後世につなげよう、阿波の人形浄瑠璃ときれいな川・阿波木偶が新町川を渡る」である。

近年、新町川は、汚染が激しく、魚も住めない川であったが、昭和四十年代後半から浄化が進み今では綺麗な水質をとおりもしている。新町川の浄化は、関係者もとりよりの市民の長い間の夢であった。そうしたことから、新町川の浄化運動を推進されている「新町川を守る会」にこの行事に参画いただくこととし、後援を

屋台村展示

建築士会全国大会にて農村舞台紹介

林茂樹

十月二十二日に和歌山市で開催された建築士会全国大会のまちづくり屋台村で農村舞台の紹介をしました。屋台村というのは、全国各地のまちづくりに関わるグループなどが、割り当てられたブースでパネルや模型などいろいろな方法で自分たちの活動を紹介し、訪れた方々は気に入った活動に投票（持ち分のシールを貼る）していただき人気の高い活動

きましたました。パネルは川上さん、ビデオ編集は岩佐さん、お二人の機関誌ワーキンググループの会員に制作していただいています。

ブースでは農村舞台の展示以外にも建



に賞を出そうというものです。

ブースのタイトルは「甦れ阿波の農村舞台」で、展示内容は農村舞台と阿波農村舞台の会の活動の紹介を三枚のパネルにして展示。ビデオは上那賀町拜宮と三好町法市での舞台復活公演を撮ったものをプロジェクトで映写して見ていただ



築士会のまちなみ研究会で取り組んでいる伝建指定へ向けて調査した東祖谷山村落合地区のパネルでの紹介や県下の町並み調査報告書などを並べて来店者に見て頂きました。

ことを知って頂くだけでよかったです。他県のブースのように客の呼び込みをするわけでもなく、商売熱心でなかったため、シールを貼っていただけました。またこのような機会があれば全国に発信してゆきたいと思えます。

この種のイベントは、会場が屋外だけに当日の天候が大いに心配された。今回は、予想外の好天となり、他のイベントとも重なって多くの観客を得ることが出来た。午後三時過ぎ、盛會裡に閉幕となった。

お願ひすることとした。そして船渡御に用いる船には、ひょうたん島を一周する周遊船二隻をご提供いただいた。

船渡御の終わった午後一時三十分からは、東公園内にしつらえた仮設舞台での人形浄瑠璃公演である。「寿式三番叟」を演じるのは川内北小学校人形浄瑠璃クラブの子供達である。愛くるしい子供の演技に観客は拍手を惜しまない。演舞が終われば、子供達へのインタビュへと続くが、子供達の、照れない対応ぶりは驚かされる。

次ぎの演目は、『日高川入相花王 渡し場の段』である。大夫は竹内雅代、三味線は鶴澤友輔師匠、人形座は、阿波人形浄瑠璃研究会青年座。青年座は、昭和五十六年発足、阿波の人形浄瑠璃をより親しみのある身近なもの、楽しいものとしてとらえ、津軽三味線やアフリカの民俗楽器ジャンベとの共演を行い、二十日、二十一日の阿波人形浄瑠璃芝居フェスティバルでは、新作の「I W A T O 三番叟」を演じるなど、常に新機軸をうちだしている。日高川では、迫力ある大蛇との絡みをたつぷりと見せ、大きな拍手を得た。